
にも話さなかった不思議な体験 6

加納 季里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にも話さなかった不思議な体験

6

【Nコード】

N2806T

【作者名】

加納 季里

【あらすじ】

「影」に感ずる体験と「病院」での体験です。皆さんも、「そういえば・・・」と思い当たる所があるかも。

（前書き）

前作からブランク期間がありましたが、地震で義兄を亡くし、その一週間後、交通事故にあい、全身打撲で動けませんでした。現在はなんとか動けるようになり仕事にも復帰しましたので、また投稿を続けます。

： 影　　： 皆さん影はありますか？　人も物も当然ありますよね。

伝説の吸血鬼　ドラキュラなら鏡にも映らないし影もありませんが。では、その影が本人のものとは全く別のもの

だったのでしょうか。成人式が終

わり、その夜は仲間6人でススキノに飲みに出掛けた我々は、飲み慣れない酒量にテンションが上がり楽しい一時を過ごしました。

帰り道、午前3時頃、大通り公

園の横を歩いていると道端に一匹の猫が横たわっていました。

すると友達の一人、佐藤雄二がその猫を蹴飛ばし、雪の中に埋めてしまいました。　　み

んは「ユウジ、そりゃあひでえーだろ。」と口々に云いましたが本人は気にした様子もなく「こういうのがあると歩きずらいんだよ。」と当然だという感じの顔で言うスタスタと歩き出し「来月、また集まるか？」と皆を誘った後、しばらくしてタクシーに乗り我々も同様に帰宅しました。　　3週間

後、再び同じメンバーで集まりましたが、雄二の様子が前回と違い暗い雰囲気、なんとか盛り上げようとしても全く盛り上がりず、そのまま時間だけが過ぎ、早めに切り上げる事になり大通り公園の横を歩いていると、雄二がとても具合悪そうにしていたので、介抱しようと近寄りながら、何気なく水銀燈に照らされた影を見ると雄二の影が異様なことに気が付きました。明らかに人の形ではありません。それは誰が見ても猫なのです。

他の者はまだ気が付いていない様子でした。恐怖は有りませんでしたが見てはいけないものを見てしまったという思いが強く、タクシーを止め雄二を半ば強制的に乗せた後、誰にも影の事を告げず帰宅しました。

二日後、職場に、雄二が亡くなったという連絡がありました。

その日の夜、雄二の家を訪れた際に、ご家族から雄二の遺体が発見された状態を聞かされた時、思わず声が出そうになりました。

雄二は自

宅近くの脇道の雪の中で、仰向けで目を見開いたままで、その目は猫の目そのもので、口の周りには何を食べたのか、血が付いて垂れており、手と顔に無数の引つ掻き傷があつたそうです。

私は影の事を話そうと思いましたが、話せませんでした。

ません。

勿論、仲間にも話して
ただ、毎年、命日になる

と、必ず雄二の自宅の周りに普段はいないはずの数匹の猫が集まるので、ご家族が気味悪がり五年後に引越して行きました。

私は、あの時見てしまった「影」

の事は今だに鮮明に覚えていますし、あれ以降、人の「影」は極力見ないようにしてきました。

また見ないとは限らないのですから。

） 2 ）

： 光る眼 ：

中学2年の秋、その日私は朝から腹痛で、胃薬を飲んだのですが、痛みが消えず熱まででてきたので、風邪薬も飲んだ所、ますます熱が上がり、41度を越え、立っていられなくなり、親が慌てて救急車を呼び、即刻入院となりました。ここは、札幌市民なら誰でも知っている中央区にある病院です。

今でこそ別の地域に移りましたが、当時は重い病気の人は殆ど来院していたように思います。 3 人部屋に入

院した私は最初の一週間、両腕に朝から晩まで点滴を行い、その間に注射を6本という全く身動きのできない日々を過ごしました。

一週間が過ぎ、点滴も片腕だけになりほんの少しですが食事もできるようになりました。 各ベッドはカーテン

で仕切られていましたが、話し声は聞こえたので私の他は小さい子

が入院しているような感じでした。

付きつきりで看病している家族の人達も心配なんだろうなあなどと思い、3日程して熱が下がり、39度前後になって少し楽になってきた時に「なんか変だな」と思うようになりました。

「小さい子だから看病するのは分かるけど、この人達、毎日消灯時間過ぎてからいるよなあ」と首をかしげたくなくなるような疑問が湧いてきて、日に日に強くなっていきました。

4日後、消灯時間が過ぎ、話し声が聞こえ始め、時計を見ると午前2時でした。

私は疑問を晴らすためにもカーテンを開ける決心をし、ソツと隙間から覗きました。見なければよかったのかも知れませんが、そこには10人程

の人間らしきものがいるのですが、皆、一様に眼が光っていたのです。私は毎日身動きのできない状態だったので、

カーテンの外を見た初めての日にその光景を見たせいもあり、怖さよりもショックの方が強く、息を殺し布団を被り丸くなりました。

次の日、看護婦さんが点滴を変えに来た時「僕の他に小さい子も入院してるんですね。」と尋ねると「この病室は、あなただけですよ。」と逆に不思議そうな顔で言われました。私の見た事はなんだったん

だろうと思ひ、その日お見舞いに来てくれた親友に成り行きを告げた所、すぐにお守りを持ってきてくれたので、ベッドにくくり付けました。その後は何事

もなく過ぎ退院しましたが、近年、ホラー映画で「光る眼」という思い出したくないタイトルの洋画が公開され、怖いもの見たさも手伝い観た所、子供達の光った眼が病室でカーテンの隙間から私が見た眼と 同じだったことに衝撃を受け、あの時の光景が鮮明に思い出されました。ホラー映画は、かなり観る方なのですが、この映画だけは二度と観ないと心に決めています。もし、皆さ

んのどなたかが病氣や怪我などで入院した時に、消灯時間が過ぎて

るのに話し声などが聞こえても、カーテンは閉めたままの方がよい
かも知れません。

（後書き）

次の不思議な体験は写真の話しを書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2806t/>

誰にも話さなかった不思議な体験 6

2011年5月15日02時40分発行